

大学生の社会参加とボランティア活動の様相 —文教大学と大学生全国調査との比較—

Research on University Students' Perceptions of Social Participation and Volunteer Activities — Comparison Between the University Students' Nation wide Survey and Bunkyo University —

二 宮 雅 也*・水 野 陽 介**・青 山 鉄 兵***・
村 上 純 一****・宮 地 さ つ き*****
Masaya NINOMIYA, Yosuke MIZUNO, Teppei AOYAMA,
Junichi MURAKAMI, Satsuki MIYACHI

要旨：本研究は、国立青少年教育振興機構が実施した「大学生のボランティア活動の実態に関する調査」による調査結果を参考として本調査結果と比較することで、文教大学学生のボランティア特性を把握することを目的としている。また依然蔓延を続けている新型コロナウイルスが、本学学生のボランティア活動に与えた影響を把握することも目的としている。

結果として、全国の大学生と比較して文教大学の学生は、1. 将来的にボランティアの果たす役割に大きな期待があること、2. 将来的、継続的なボランティアへの関わり意識が高いこと、3. ボランティアへの参加動機として自分の成長やスキルアップへの意識が高いことが推測される結果が把握された。また、本学学生のこれらの意識はボランティア経験の有無に連関があり、ボランティア経験のある学生の方がいずれも意識が高い傾向があることが把握された。

キーワード：ボランティア，大学生，新型コロナウイルス

1. はじめに

2020 年初めから広がった新型コロナウイルスは、大学生の日常生活を一変させた。授業はオンライン化され、キャンパスに入校することも制限され、ゼミや部活・サークルをはじめとした

*にのみや まさや 文教大学人間科学部

**みずの ようすけ 文教大学生生活科学研究所

***あおやま てっぺい 文教大学人間科学部

****むらかみ じゅんいち 文教大学人間科学部

*****みやち さつき 文教大学人間科学部

本来の学生生活が一時的に停止することとなった。もちろん、本研究の対象である学生のボランティア活動もそのほとんどが中止となった。

しかし、若者にとって社会的危機は、ときに自身のボランティアリズムを覚醒させることにもなる。1923年に発生した関東大震災は、学生セツルメントの発展と大きな関係性がある。¹⁾ 1995年に発生した阪神淡路大震災では、2ヶ月の間に多くの若者を含む延べ約100万人のボランティアが全国各地から訪れ、「ボランティア元年」という言葉まで誕生した。さらにそれを上回る規模の大災害となった、2011年東日本大震災では、発生直後の災害支援活動から、今日に至る復興支援活動まで長期間にわたる活動が継続されていることに特徴がある。こうした活動にも全国の多くの若者が参加している。

確かに、文教大学越谷キャンパスでも次のような取り組みがあった。2011年3月16日、晴れやかな卒業式を迎えるはずだった4年生を中心に、越谷市内の駅やスーパーで募金活動を実施した。地震により卒業式が中止になったため、学生が「俺たちなりの卒業式をやろう」とSNSで友人らに呼びかけ実施されたものであった。²⁾ また、新年度を迎えてからは、「BRO 東日本学生復興支援本部」というサークル組織が結成され、募金活動や各種ボランティア活動の立案等が行われるようになった。³⁾ 湘南キャンパスでは、国際学部の学生で構成されるボランティアサークル「文教ボランティアズ」が、いち早く被災した宮城県大川小学校での泥かき作業や子ども達への学習支援活動を行なった。⁴⁾

上記の災害に対応したボランティア活動のみならず、文教大学は私立大学の中で特に教員養成の中核をこれまで担ってきており、学校や地域における子どもを対象としたボランティア活動が盛んな経緯がある。また、地域活性の観点や、さまざまな社会課題を対象とする国際系、観光系、福祉系に関連した学科等もあることから、日頃から広い領域でのボランティア活動の盛んな大学である。こうした背景から、ボランティアに対する意識や行動が、全国調査結果よりもボランティアに対してより肯定的で積極的であるとの仮説を設定している。

ただ新型コロナウイルスの蔓延は、これまでの災害危機とは異なり、長期間にわたり社会経済活動そのものの停止を余儀なくされた。そうした状況を踏まえながらも、本研究は、文教大学学生が、ボランティアについてどのような価値観を抱いているのか、さらにコロナ禍におけるボランティア活動の実態を把握することを目的としている。具体的には、2019年に国立青少年教育振興機構が実施した全国調査「大学生のボランティア活動の実態に関する調査」の結果を参考値として本調査結果と比較することで、文教大学学生のボランティア特性を把握したい。

2. 研究方法

(1) 調査対象と方法

文教大学学生のボランティアに関する価値観や活動の実態を把握することを目的として、越谷、湘南、東京あだちの3キャンパス全ての学生を対象に、eメールにアンケートフォームを添付する形式で調査を行った。調査期間は2021年3月1日～3月17日、有効回答数は638である。

(2) 調査項目

調査項目は、基本的属性(性別、学年、所属学部)と1. ボランティア活動状況、2. 活動への参加動機、3. 活動から得られた成果、4. 今後の活動希望、5. ボランティアに関する考え

方とした。尚、1 から 5 の調査項目については、2019 年に国立青少年教育振興機構が実施した「大学生のボランティア活動の実態に関する調査」（以下、機構調査）との比較を行うため同項目とした。尚、ボランティア活動への参加定義については、①「自主的に参加したもの」（サークル等での活動も含む）だけでなく、②「大学の授業やゼミの一環で参加したもの」（単位にかかわるもの）の双方を含むもの（ただし、「アルバイト」「インターン」「資格のための実習」は含まない）として捉えている。

（３）倫理的配慮

本調査は、調査の趣旨と意義、倫理的配慮等の説明を行い、同意した者のみ回答する方式として実施した。

３．結果と考察

（１）回答者の属性

はじめに分析対象者の基本属性をみておく（表１）。性別では「男性」32.6%、「女性」66.3%、「どちらとも言えない」1.1%と男女比は女性の割合が大きかった。学年では、「１年生」27.6%、「２年生」26.6%、「３年生」25.1%、「４年生」20.7%と学年比はほぼ母集団に準ずる。学部別では、「教育学部」33.1%、「人間科学部」26.2%、「文学部」19.0%、「情報学部」8.3%、「健康栄養学部」3.0%、「国際学部」7.2%、「経営学部」3.3%と、越谷キャンパスの学部の割合が大きくなっている。

表 1 分析対象者の内訳

		n=638	
属性		度数	構成比(%)
性別	男性	208	32.6
	女性	423	66.3
	どちらとも言えない	7	1.1
学年	1年生	176	27.6
	2年生	170	26.6
	3年生	160	25.1
	4年生以上	132	20.7
学部	教育	211	33.1
	人間科学	167	26.2
	文	121	19.0
	情報	53	8.3
	健康栄養	19	3.0
	国際	46	7.2
	経営	21	3.3

（２）ボランティア活動状況

大学入学後のボランティア活動・社会貢献活動の参加状況をみると、「したことがある」36.4%、「したことがない」63.6%となっている（図１）。また、大学入学後のボランティア実践者のうち、新型コロナウイルス感染拡大に伴うボランティア活動への影響については、「大きく影響を受け、

活動ができなかった」25.3%、「影響を受けたが、活動はできた」52.3%となっている（図2）。

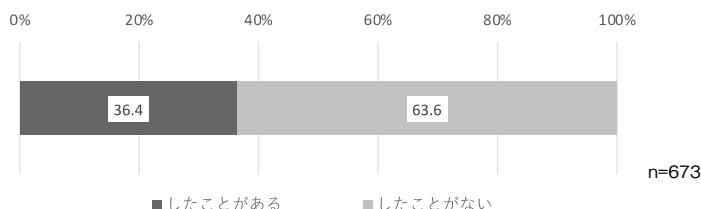


図1 大学入学後のボランティア活動・社会貢献活動

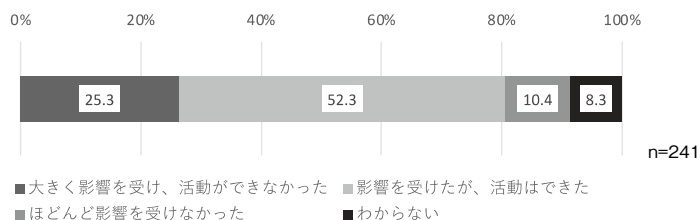


図2 新型コロナウイルスによるボランティア活動への影響

機構調査では、大学入学後のボランティア実施割合 37.5%となっており、文教大学のボランティア実施割合と同程度である。⁵⁾ ただし、本調査が新型コロナウイルスの影響を受けた時期での調査ということは考慮されなければならない。

活動の内容をみると、「小学生を対象とした活動」が53.6%と最も大きく、次いで「中学生・高校生を対象とした活動」32.6%、「特定の課題やニーズを抱えた子どもを対象とした活動」27.7%と子どもや中高生を対象とした活動が多くなっている（図3）。これは、機構調査とも傾向が類似している。⁶⁾

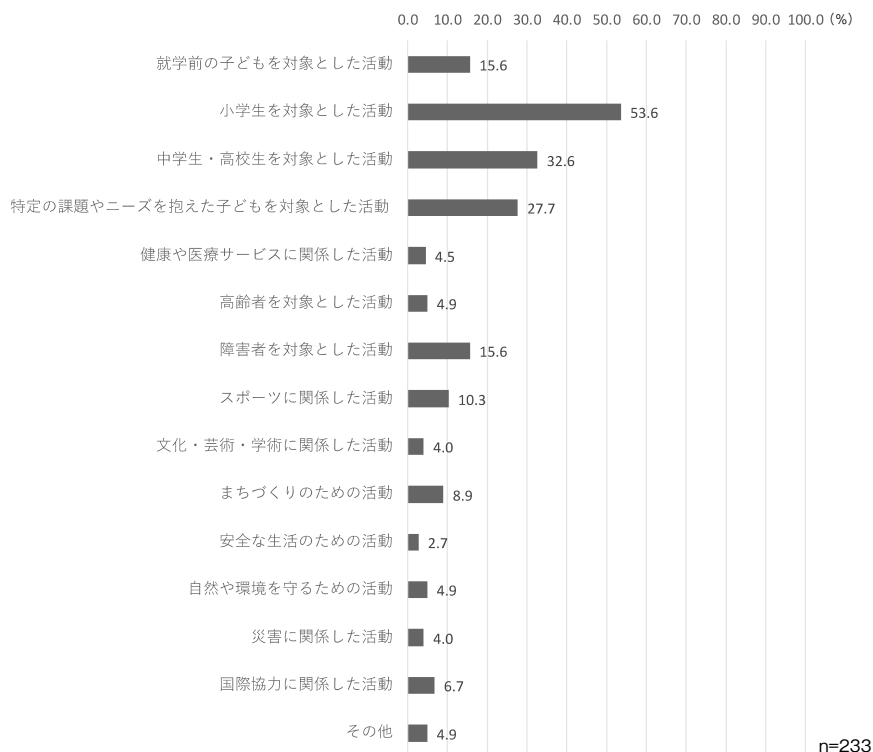


図3 ボランティアの活動内容（複数回答）

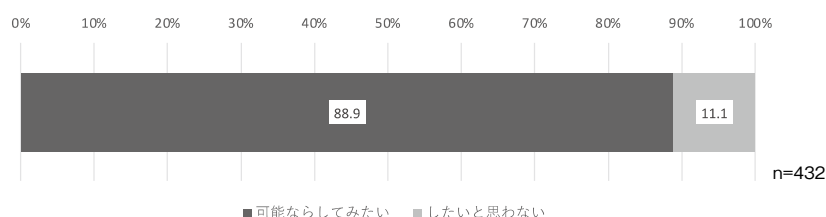


図 4 ボランティア活動未実施者のボランティア実施希望

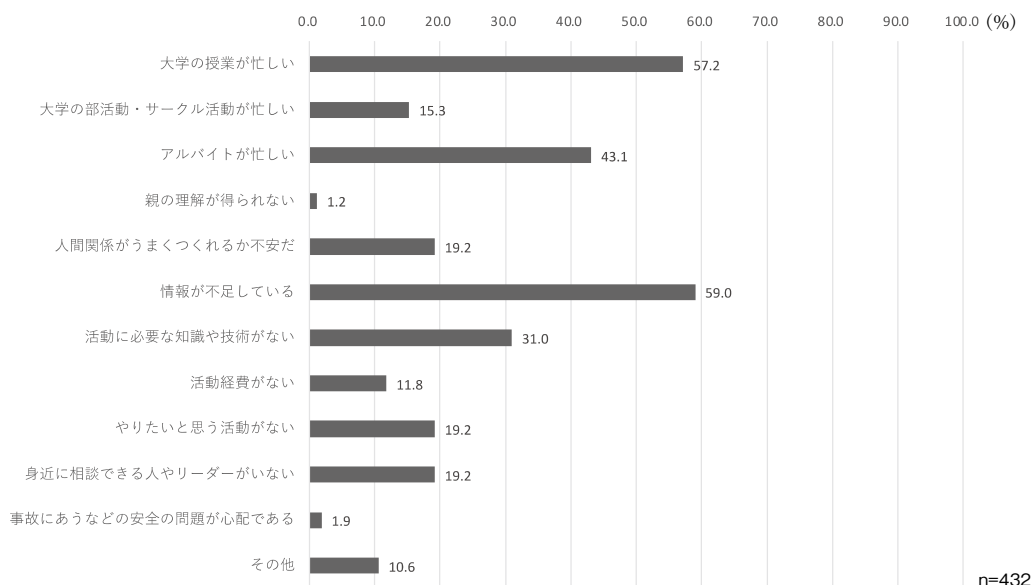


図 5 ボランティア活動未実施の要因（複数回答）

一方で、活動をしたことがないと答えた学生のうち、88.9%の学生が「可能ならしてみたい」と答えており、経験の有無に関わらずボランティア活動への関心の高さが伺える（図4）。また、活動ができなかった要因としては、「情報が不足している」が38.6%と最も大きく、ついで「大学の授業が忙しい」36.5%、「アルバイトが忙しい」36.5%となっている（図5）。

（3）ボランティア活動の動機

ボランティア活動の動機について、本学学生の特徴を明らかにするために、機構調査との比較を行なった（図6）。本学の参加動機上位5項目と比較すると、「自分の成長につながったから」（本調査72.4%、機構調査45.4%）、「活動分野に関する経験やスキルを得たかったから」（本調査56.9%、機構調査24.0%）、「関心のある分野や社会問題の現場を見たかったから」（本調査48.3%、機構調査26.2%）、「さまざまな人と関わりたかったから」（本調査48.3%、機構調査28.5%）、「誰かの役に立ちたかったから」（本調査40.5%、機構調査25.8%）となっている。

上位項目を比較すると、順位は若干異なるものの共通する項目が多かった。しかし、上位2番目の参加動機については、機構調査では、「さまざまな人と関わりたかったから」だったのに対し、本学では、「活動分野に関する経験やスキルを得たかったから」と異なる項目がランクインした。さらに、それぞれの項目のポイントの差が大きく、「活動分野に関する経験やスキルを得たかったから」「自分の成長につながったから」については、それぞれ30ポイント程度の差があ

った。この結果から本学学生は、特に成長やスキル獲得、社会問題、ボランティアを通じた交流意識が高いことが推察される。

過去に行われた調査結果としては、公益財団法人日本財団学生ボランティアセンター（現、日本財団ボランティアセンター）が行った、「全国学生1万人～ボランティアに関する意識調査2017～」によると、ボランティアをはじめの最大のきっかけとして、約3割もの学生が、「自己実現・自分自身のため」と答えている。また、内閣府が2019年に実施した「市民の社会貢献に関する実態調査」でも、「自己啓発や自らの成長につながると考えるため」という項目が学生の参加動機として最も高い割合になっている。こうした結果と本学学生の結果も共通しており、自分の経験や学びのために、ボランティア活動を選択する実態が推察される。

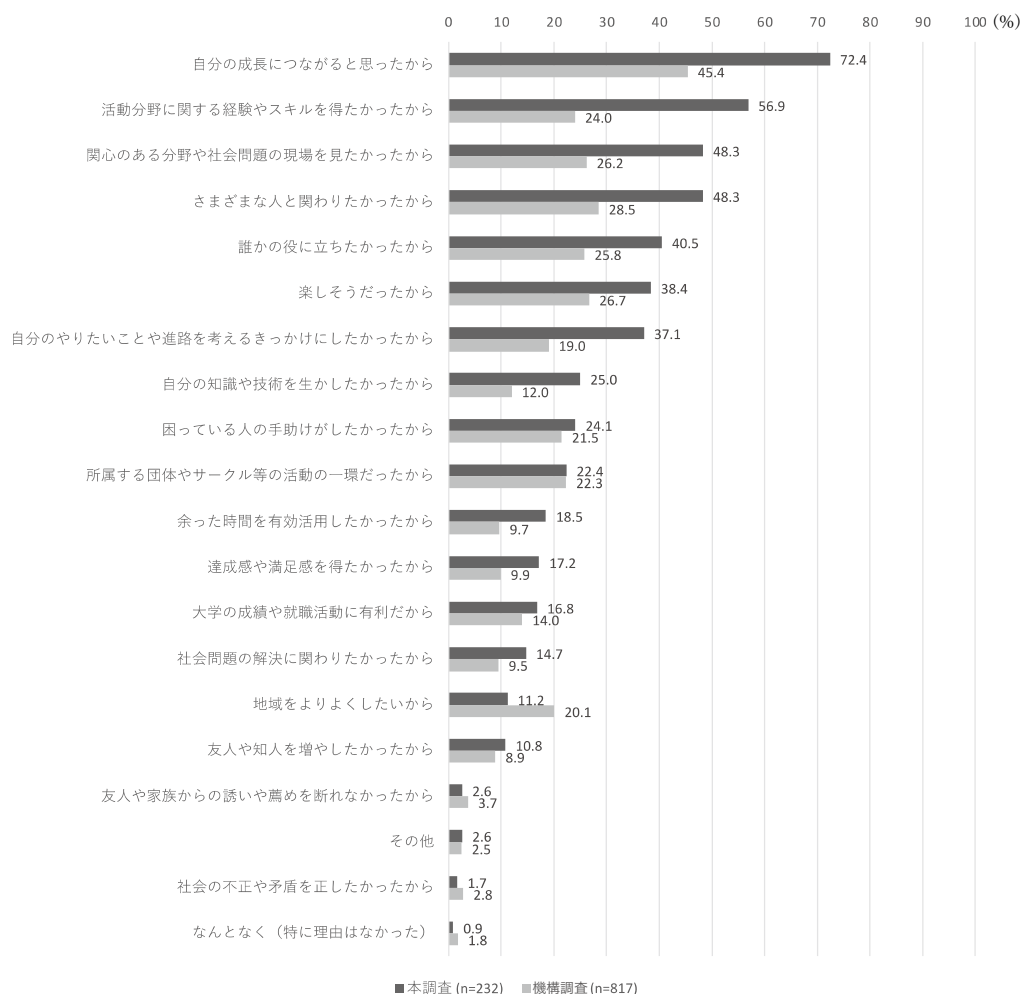


図6 ボランティア参加動機の比較（複数回答）

(4) 活動に参加してよかったこと

活動に参加してよかったことについて、本学学生の特徴を明らかにするために、機構調査との比較を行なった(図7)。本学の活動に参加してよかったことの上位5項目と比較すると、「楽しかった」(本調査 62.5%、機構調査 41.6%)、「ものの見方、考え方が広がった」(本調査 59.1%、機構調査 40.5%)、「相手から感謝された」(本調査 51.3%、機構調査 38.9%)、「達成感や満足感が得られた」(本調査 49.1%、機構調査 32.3%)、「関心のある分野や社会問題の現場を見られた」(本調査 44.4%、機構調査 22.5%)となっている。

項目を比較すると上位項目の構成は同じであり、15～20ポイント程度の差がみられた。特に、「関心のある分野や社会問題の現場を見られた」「活動分野に関する知識や技能が身についた」について差が大きかった。本学学生は、ボランティア活動を通じて得られた体験や知識について満足度が高いことが推察される。

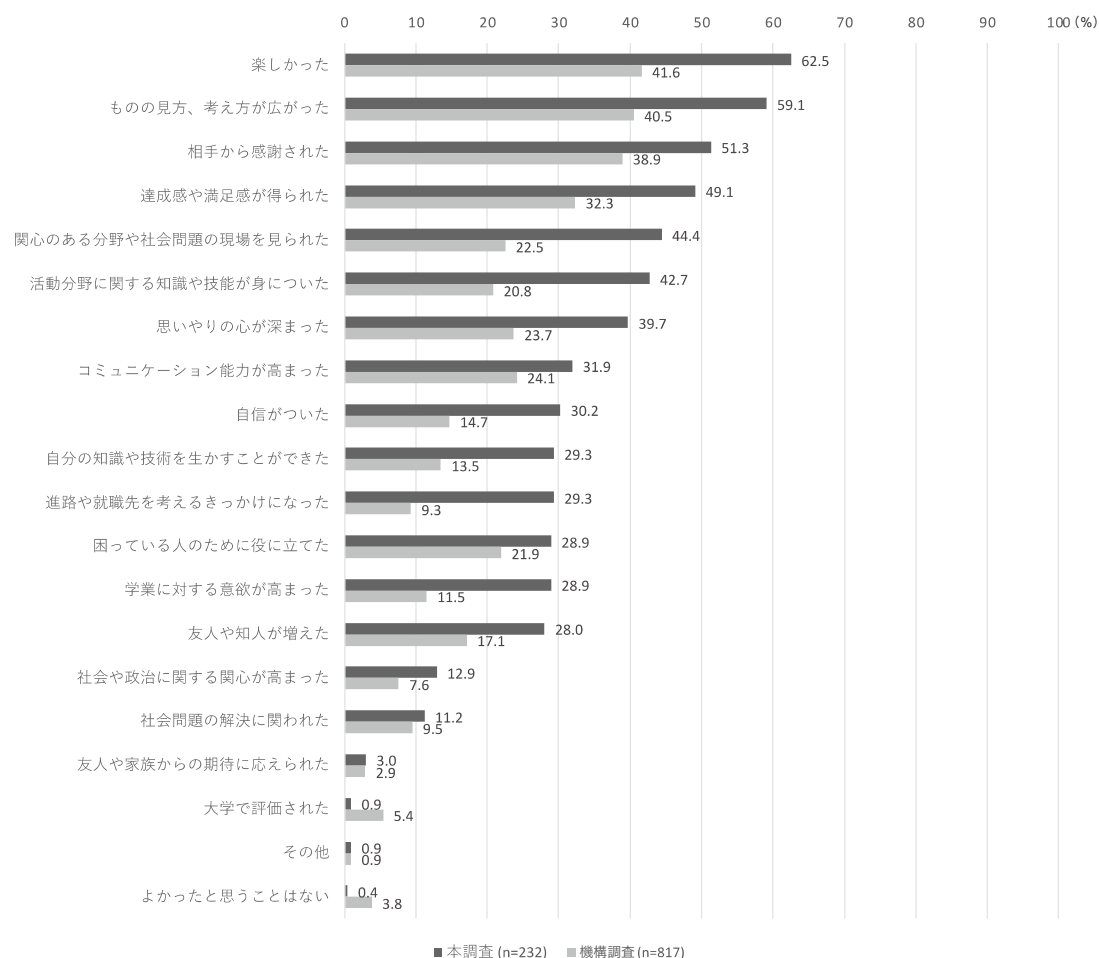


図7 ボランティア活動に参加してよかったこと (複数回答)

(5) ボランティア活動に対する意識

ボランティア活動に関する意識について、1.「自由時間があれば、ボランティア活動よりもアルバイトを優先する」、2.「大学は、ボランティア活動の経験を入試の評価に加えるべきだ」、3.「大学は、ボランティア活動の経験を単位に加えるべきだ」、4.「企業は、ボランティア活動

の経験を採用の評価に加えるべきだ」、5.「ボランティア活動で、交通費や昼食代を受け取ってもよい」、6.「ボランティア活動で、報酬や謝金を受け取ってもよい」、7.「これからの社会では、ボランティアの果たす役割が大きくなるはずだ」、8.「今後は（今後も）、ボランティア活動に積極的に取り組んでいきたい」の8項目について、「とてもそう思う」～「まったくそう思わない」の5件法で回答を得た。各項目の最も肯定的な回答（とてもそう思う）に注目して機構調査と比較したところ、1.「自由時間があれば、ボランティア活動よりもアルバイトを優先する」、6.「ボランティア活動で、報酬や謝金を受け取ってもよい」、7.「これからの社会では、ボランティアの果たす役割が大きくなるはずだ」、8.「今後は（今後も）、ボランティア活動に積極的に取り組んでいきたい」の4項目について機構調査との間に大きな差が見られた（図8～11）。この結果から、本学学生は、自由時間とボランティア、アルバイトの関係性について、機構調査と比較して自由時間のアルバイトの優先意識やボランティアにおける報酬・謝金意識がやや低いこと、一方でボランティアが社会で果たす役割や今後のボランティア参加意識は高い傾向があることが推察される。

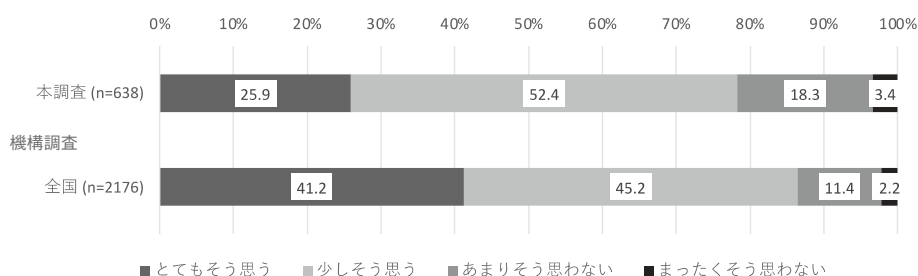


図8 自由時間があれば、ボランティア活動よりもアルバイトを優先する

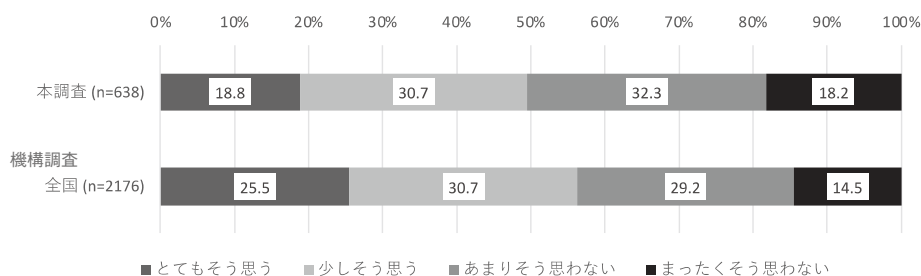


図9 ボランティア活動で、報酬や謝金を受け取ってもよい

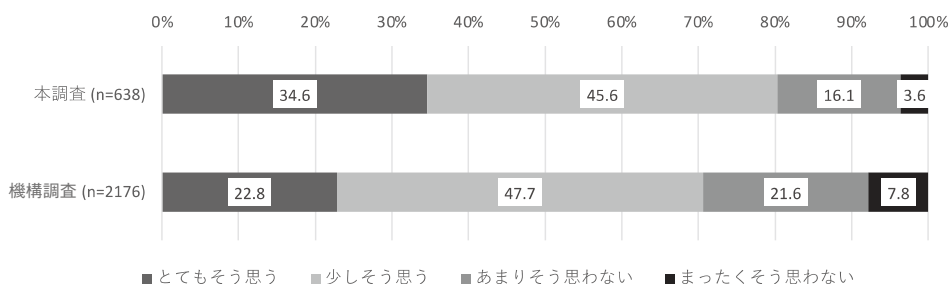


図10 これからの社会では、ボランティアの果たす役割が大きくなるはずだ

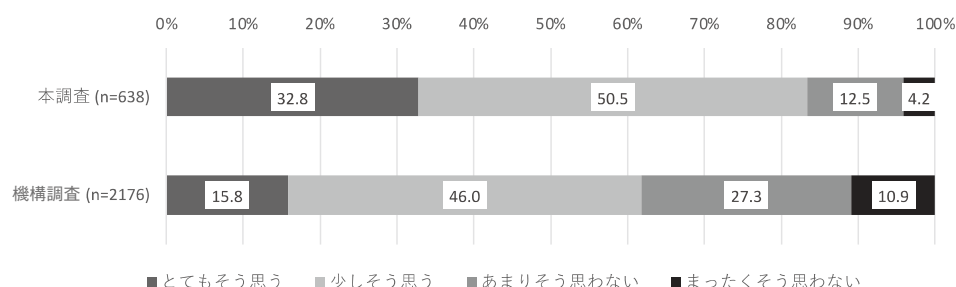


図 11 今後は（今後も）、ボランティア活動に積極的に取り組んでいきたい

(6) ボランティア経験がボランティア活動に対する意識に与える影響

さらに、本学学生においてボランティア活動経験の有無と、ボランティア活動に関する意識 8 項目との関連を検証するためにクロス集計およびカイ二乗検定を行った。連関係数には Cramer's V を使用した。

表 2 ボランティア経験とボランティア活動に対する意識

項目	ボランティア 経験 (n)	とても そう思う	少し そう思う	あまり そう思わない	まったく そう思わない	χ^2	V
自由時間があれば、ボランティア活動よりもアルバイトを優先する	あり(241)	17.8	53.1	23.2	5.8	18.90 **	.168
	なし(432)	30.1	52.1	15.3	2.5		
大学は、ボランティア活動の経験を入試の評価に加えるべきだ	あり(241)	15.8	28.6	38.2	17.4	18.90 n.s.	-
	なし(432)	10.9	26.2	41.0	22.0		
大学は、ボランティア活動の経験を単位に加えるべきだ	あり(241)	15.4	19.1	42.3	23.2	13.69 **	.143
	なし(432)	12.3	31.5	39.6	16.7		
企業は、ボランティア活動の経験を採用の評価に加えるべきだ	あり(241)	20.7	41.9	26.1	11.2	8.87 *	.115
	なし(432)	13.4	39.4	33.1	14.1		
ボランティア活動で、交通費や昼食代を受け取ってもよい	あり(241)	36.5	44.0	17.0	2.5	20.71 **	.175
	なし(432)	25.0	42.1	23.6	9.3		
ボランティア活動で、報酬や謝金を受け取ってもよい	あり(241)	24.5	35.7	29.9	10.0	24.33 **	.190
	なし(432)	16.2	27.5	32.9	23.4		
これからの社会では、ボランティアの果たす役割が大きくなるはずだ	あり(241)	40.2	44.4	13.3	2.1	10.03 *	.122
	なし(432)	30.6	46.1	18.5	4.9		
今後は（今後も）、ボランティア活動に積極的に取り組んでいきたい	あり(241)	45.6	44.0	8.7	1.7	36.57 **	.233
	なし(432)	24.5	53.9	15.5	6.0		

p<.01=** p<.05=*

この結果、「企業は、ボランティア活動の経験を採用の評価に加えるべきだ」「ボランティア活動で、交通費や昼食代を受け取ってもよい」「ボランティア活動で、報酬や謝金を受け取ってもよい」「これからの社会では、ボランティアの果たす役割が大きくなるはずだ」「今後は（今後も）、ボランティア活動に積極的に取り組んでいきたい」の 5 項目について、「思う」（とてもそう思う・少しそう思う合計）が多い傾向がみられた。また、「今後は（今後も）、ボランティア活動に積極的に取り組んでいきたい」については、ボランティア経験との関連が強いことが把握された。一方、「自由時間があれば、ボランティア活動よりもアルバイトを優先する」「大学は、ボランティア活動という経験を単位に加えるべきだ」の 2 項目については、ボランティア経験がない方が「思う」（とてもそう思う・少しそう思う合計）が多い傾向がみられた。「大学は、ボランティア活動の経験を入試の評価に加えるべきだ」については、本調査データにおいてはボランティア経験の有無との間に関連はみられなかった。

4. 終わりに

本研究では以下のことが把握された。機構調査と比較して文教大学の学生は、1. 将来的にボランティアの果たす役割への期待が高いこと、2. 将来的、継続的なボランティア活動への関わり意識が高いこと、3. ボランティアへの参加動機として自分の成長やスキルアップへの意識が高いことが特に示された。また、本学学生については、ボランティア実施者の約8割が新型コロナウイルスの影響を受けており、そのうち4人に1人は活動ができない状況であった。

本学学生のボランティア活動に対する将来的な期待や、自己の成長、スキルアップの意識の高さはそのままキャリア形成へも関係する可能性がある。特に、「ガクチカ」と呼ばれる、いわゆる「学生時代に力を入れたこと」とボランティア活動の関係性は大きいだろう。一定数ではあるが、ボランティア活動ができなかった学生が、キャリア形成にどのような影響を与えているのかについては、今後さらなる調査研究が必要である。

また、本研究の課題としては、サンプルデータに偏りがみられたことである。データの約8割が越谷キャンパスからの回答となっており、学部特性や教職を志す学生が多いことも結果を把握する上で念頭におかなければならない。

謝 辞

なお本調査は、文教大学附属生活科学研究所のプロジェクト研究7「若者の社会参加とボランティアの様相」の一環として予算の助成を受けて実施したものである。

注

1. 池田は日本のボランティアのはじまりを、東京帝大の学生たちによる関東大震災後の救護活動およびセツルメントの開設として解説している。また、佐々木は1995年に起きた阪神・淡路大震災や日本海沖でのナホトカ号からの重油流出事故において、多くの学生ボランティアが全国から駆けつけたことを記している。
2. がんばろう～首都圏から、街頭募金が卒業式。朝日新聞。2011-03-17、埼玉県版、p.26.
3. 大学プレスセンター HP、「学生が長期的被災者支援を目的に「東日本復興支援本部」を設立—2014年までの3年間 文教大学越谷校舎—」<https://www.u-presscenter.jp/article/post-29229.html>（最終アクセス日 2022年11月30日）
4. 震災直後から支援に汗、読売新聞。2011-06-27、神奈川県版、p.33.
5. 国立青少年教育振興機構が2019年3月に実施した調査では、大学入学後のボランティア実施割合は37.5%となっている。
6. 5)の上記同調査においても、小学生を対象とした活動、中学生・高校生を対象とした活動の順に割合が高くなっている。

引用文献

池田浩士（2019）,「ボランティアとファシズム：自発性と社会貢献の近現代史」, 人文書院。
佐々木正道編（2003）,「大学生とボランティアに関する実証的研究」, ミネルヴァ書房。
日本財団ボランティアセンター（2017）,「全国学生1万人アンケート～ボランティアに関する意識調査」。
国立青少年教育振興機構青少年教育研究センター（2020）,「大学生のボランティア活動等に関する調査」報告書。
内閣府（2020）,「令和元年度市民の社会貢献に関する実態調査」報告書。